

4) ヴィエンチャン県ナパイ村農村調査

30分間ナパイ村を歩き適宜住民に答えてもらいながら把握できた点

- 人口約 600 人、110 戸。
- 家屋のほとんどが木製高床式。屋根はトタン、藁・萱、瓦など。新築には煉瓦、コンクリートブロック作りの方が木製より安く、長持ちするので好まれている。
- 村の電化は 3 年前。ほとんどの家に電線が繋がっている。
- テレビのアンテナはおよそ 3 軒に 2 軒の割合で取り付けられている。
- 20 年位前に日本の団体（現校長はその団体名を覚えていない）がセメントとトタン屋根を援助し、住民が建設した小学校がある。（写真 2）幼稚園、小学 1～5 年生、児童数 172。先生 7 人。村人が近くの町でトレーニングを受けて先生になっている（ほとんどが校長の親戚）。学校の電化 2 年前。
- 小学校卒業生の 90%が隣村の中学校へ進学。そのほとんどが高校まで進学する。高校卒業生のうち大学進学者は約 20%。
- 深井戸を電力で汲み上げる設備が村内に 4 基。うち使用中のものは 3 基。（写真 3）
- 公衆トイレはなく、各家庭の裏にトイレがあるという（確認はできなかった）。
- 小学校前の雑貨屋では、小売調味料、スナック菓子、手作り菓子、洗剤、文房具、おもちゃ、麺類、果物、野菜等が手に入る。軽食も食べられる。全て隣村から仕入れている。（ここで加工して売っている物はない）（写真 4）



写真 2. ナパイ村の小学校



写真 3. ナパイ村の共同水道設備



写真 4. ナパイ村の雑貨屋

- ・ 台所の状況：鉄製三点カマドと火鉢のようなものを使い、薪、炭で調理。隣家の水道から水を汲み、水瓶で保存。調理道具は包丁、まな板、櫃、膳、鍋4種、やかん、柄杓など。(写真5)
- ・ 保健クリニックは3km以内の隣村にあるが、病院は5kmほど先の郡庁にしかない。
- ・ この村より先に木材伐採場があるので、住民は通過するトラックから通行料を取り、村の様々な活動資金に当てている。
- ・ JICAプロジェクトが購入した精米機があり、使用料を取ってメンテナンス費用に貯金している。周辺の村人にも開放している。
- ・ 家庭菜園（葉・葱類、瓜類、豆類）やアヒルの養殖も見られた。
- ・ 7年間JICAの農業農林開発プロジェクトが入っていたからか、住民は友好的で我々に挨拶をし、質問にも親切に答えてくれた。

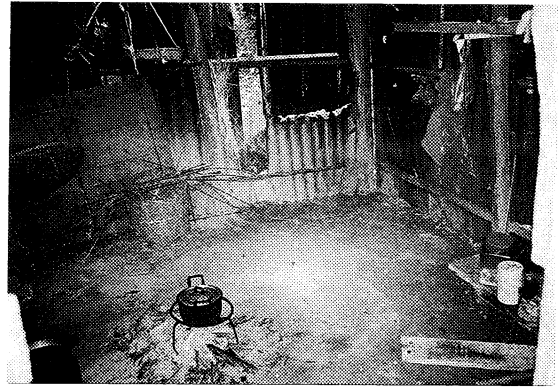


写真5. ナパイ村住民の台所

5) JICAヴィエンチャン県農業農村開発プロジェクト (VARDP) ワークショップ視察

(The Agricultural and Rural Development Project Phase II in Vientiane Province:VARDP)

参加者：プロジェクトに参加した女性約10人、男性約14人

内容：ヴィエンチャン県ナパイ村では1995年から7年間続き、2週間後に終了予定の同プロジェクトの終了時評価が住民の手によって行われていた。参加者は男2女1の3グループに分かれて、それぞれのプロジェクトの成果、問題点、対応策について討議し、全体に発表していた。グループディスカッションの際、住民のリーダーは慣れている様子で自然と討議を進行していた。全体発表は発表者も冗談を言ったり、聴衆からやじが飛んだり、和気あいあいとした雰囲気で行われていた。今後の5ヵ年計画は郡役場の農村開発担当者 (VARDPスタッフでもある) によって作



写真6. ワークショップ風景
(グループ討議)

成されており、それが発表され住民の支持を受けていた。(写真6, 7)



写真7. ワークショップ風景 (全体発表)

6) 「2002年世界食糧デー第1回ラオスシンポジウム：食糧安全と農村生活」参加

(2002 World Food Day: 1st Lao Symposium on Food Security and Rural Livelihoods)

参加者：ラオスの農村開発分野で活動する国連機関、政府、NGO、プライベートセクター関係者約120名

概要¹：食糧安全と持続可能な農村生活に携わる様々な機関からの参加者に、農村開発のプログラムやその成果、技術について発表する機会を提供し、知識や経験の共有、セクター間のネットワークや協力の促進、さらにこれらに対する人々の認識を高めることがこのシンポジウムの目的である。

基調演説者はラオス農林省から2名、続いてFAO、国際稲研究所、林業関係民間企業、ドイツ開発サービス、UNDCP、NGO、そして佐藤の11名であった²。

ビデオ上映³ (写真8)：ビデオ「生活と水」を壁に投影して上映し、英語での弁士は太田が担当した。ラオス人参加者からは、「当時の日本の状況が現在のラオスと似ていて驚いた」「ラオスでも水問題は深刻である」「日本人の住民の協力体制と、行政のサポートは素晴らしい」



写真8. ビデオ上映

¹ 附属資料1「2002 World Food Day シンポジウムプログラム」参照

² 附属資料2「2002 World Food Day シンポジウム抄録」参照

³ 附属資料3「生活と水」英語スクリプト参照

といった感想が聞かれた。

佐藤プレゼンテーション⁴ (写真9) :

「Food Security and Rural Livelihood: Experiences of the Livelihood Improvement Programme (LIP) in Post-War Japan」と題し、戦後日本の生活改善経験について概説し、特に食糧安全を目指すには食糧の増産だけでなく、後回しにされがちな生活の質向上も車の両輪として同時に進めていかなければならないことを強調した。日本の具体的な経験として、共同保育や共同炊事、カマドの改善などを挙げ、これらは全て農村婦人達が生活改良普及員の支援を得て、自分たちでオーナーシップをとり活動した実績であることを解説した。その他にも卵貯金やつもり貯金、頼母子講、共同薪集めなどすぐに役立つようなグループ活動も紹介した。さらには、日本もかつては被援助国であった状況について説明し、日本が外国からの援助や外部者からの強制をいかにうまく活用して自国の発展へ繋げたか、そのポイントをまとめた。発表時間 35 分。パワーポイントを使用した。



写真9. 佐藤発表

7) 生活改善3プロジェクト合同コミュニティ・ワークショップ

(Joint Community Workshop on Livelihood Improvement Programme)

参加者：ヴィエンチャン県バンキ村近郊の7村から男性9名、女性16名、計25名。

スタッフはJICA VARDP 5名、JVC 5名、FAO 5名、計15名。

内容⁵：

時間	内容
9:30	アイスブレイキング：ゲームをしながら参加者の緊張感をほぐす (写真10) 

写真10. アイスブレイキング

⁴ 附属資料4 佐藤発表資料参照

⁵ 附属資料5「Joint Community Workshop プログラム」参照

9:50	開会：挨拶、ワークショップの予定、目的、参加者紹介など
10:10	<p>ビデオ「生活と水」上映： （ラオ語のナレーション付き）（写真11） これはどこか、いつの話かなどのクイズを入れた ビデオに対する参加者の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 女性は毎日重労働をしている ・ 水汲みに遠くまで行かなくてはいけないところがラオスと同じだ ・ 水道が入れば女性の労働は軽減される ・ 水質が悪いといろいろな病気が起こる ・ 自分の村もかつては川まで水汲みに行かなくてはならず、しかも水質が悪かったが、今では政府とJICAからの援助によりきれいな水が手に入るようになった、など
10:55	休憩
11:05	<p>グループディスカッション 1：（写真12） 参加者は村混合、男1、女2の3グループに分かれ、村の過去の問題点とその解決方法、また現在の問題点とその解決策を話し合い、模造紙にまとめた。</p>

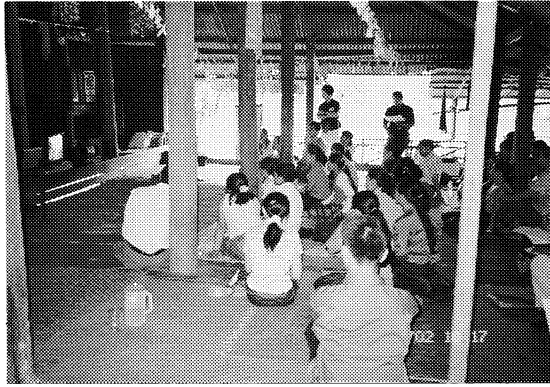


写真11. ビデオ上映



写真12. グループディスカッション

12:00	<p>全体発表1：(写真13) 過去の問題と解決策 水・米・水田用地の3点が足りないことは、3グループ共通の問題であり、これらの解決策としてJICAやJVCが支援している米銀行⁶が好評を得ていることが分かった。女性グループの特徴としては、学校、道、病院、飲料水、電気などのインフラ整備についての問題意識が強く、それらを主に外部者の援助で解決してきたことを挙げている。一方男性グループは例えば畑の生産性が低い、作物の質が悪い、灌漑設備がない、家畜が病気になるがちといった農業生産に関する問題意識が強く、また教育問題や生活の苦しさなども挙げられた。これらに対する解決策は多様だが、主に土地の開墾、土壌を良くする、混作するといった方法により、個人レベルで解決してきたようだ。</p> <p>現在の問題と解決策 ここでも女性グループは学校、井戸、病院、寺などインフラの不備や老朽化を問題にし、解決策として住民が協力することを挙げていた。男性グループは女性が挙げたものに加え、自助努力が足りないことも指摘していたが、それに対する解決方法には触れていなかった。</p>
12:20	<p>昼食（バンキ村のワークショップに参加しなかった女性たちが調理） 献立：もち米、筍のスープ、野菜炒め、揚げ魚、肉野菜炒め</p>
13:30	<p>アイスブレーキング：ゲームをしながら参加者の緊張感をほぐす</p>
13:45	<p>プレゼンテーション1：Mr. Boun JVCが簡易水道建設を支援したファイホック村の代表者が、村での活動経験について発表。建設費用約5,000ドルのうち80%はJVCが支援したが、その他の費用と労働は村人の参加で補ったことを説明。OHPで建設現場や作業状況の写真、資材などの写真を見せた。参加者からは、建設技術や管理方法についての質問があった。</p>

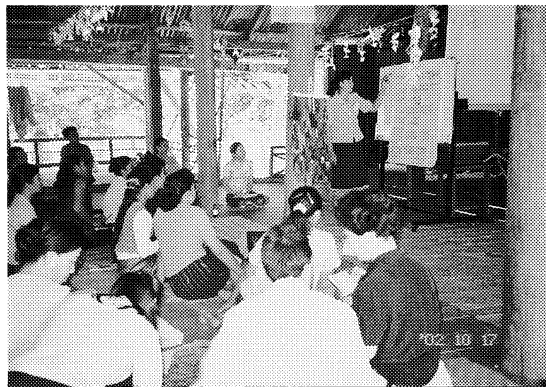


写真13. 全体発表

⁶ 米を貯蓄し、種籾として、食用として不足したメンバーに貸し出す。収穫できたときに現物で返納する。最初の貯蓄米をドナーが援助することが多い。利息はそれぞれだが大体民間業者の1/3程度。

14:15	<p>グループディスカッション 2 :</p> <p>参加者は男女混合、プロジェクト別 (J I C A、 F A O、 J V C) の三つのグループに分かれ、村の良い点、改善すべき点、夢、夢へのアプローチ方法について話し合い、模造紙にまとめ、全体に発表する。</p>
15:00	<p>全体発表 2 :</p> <p>村の良い点 どのグループも学校、井戸など村にある設備を列挙し、そして住民の仲が良いこと、伝統的な協力体制があること、住民組織があること、健康で労働力があることなどを挙げていた。</p> <p>改善すべき点 不足しているインフラや農業に関する問題が言及されているのはどのグループにも同じだが、 J I C A と J V C の村は共同労働などに協力しない住民がいることを問題としていた。</p> <p>夢 夢に上げられたものはほぼ上記の改善すべき点の裏返しであった。珍しいものでは先進国に研修旅行に行くこと (J I C A グループ)、知識を得ること (J V C グループ) など。</p> <p>夢へのアプローチ方法 既存の組織を使う。例えば米銀行をもっと利用する、住民組織から地方政府に通電、学校・道路建設などの申請をするなど。トラクターを共同購入するために寄付を募るといった具体案も出された (J V C グループ)。村のハーモニーを良くする (J I C A、 F A O グループ) といった意見もあった。</p>
15:10	<p>プレゼンテーション 2 : Mrs. Phonesamai</p> <p>J V C が訓練したナワイ村の農業と家畜技術指導のボランティア。米銀行を設立し、各村に普及した。野菜栽培の指導もした。</p>

プレゼンテーション3：山田瓊子

(写真14、15、17)

日本とフィリピンでの山田の活動経験を事例に用い、生活改善運動を通じたグループ活動、地域活動について発表。

生活改善は今の状況を少しでも良くする為の技術を通して人を育てることが目的で、一人では難しいことだからグループで取り組むのが良い。取り組む課題は、住民の誰もが関心を持っている「金儲け・命・子ども」の3点のいずれにも関係することが望ましく、「自分にもできそう」と思える簡単なことから始めると取り掛かりがうまくいく。例えばフィリピンで行った「ウビ料理コンテスト」は、それまで生産過剰で市場価格が低落していたウビ芋に付加価値をつけることで商品価値を上げ、ウビ農家の収入向上(金儲け)が第一の目的であったが、ウビ加工で様々なレシピが生み出され、食べ方に工夫がされるようになって栄養改善ができた(命)、またレシピの考案などで母親が考えるようになった、これに刺激を受け子ども達も勉強に力が入るなどいい影響を受けた(子ども)といった総合的な効果が得られた。またコンテストの審査員を地元の様々な分野の名士(議員、ホテルのオーナー、隣村の代表者、先生など)にお願いすることは重要で、これにより①地域の注目を集めた、②彼らのネットワークができた、③入賞作品が商品化されたときの販路開拓に繋がった、④行政のサポートが得られ

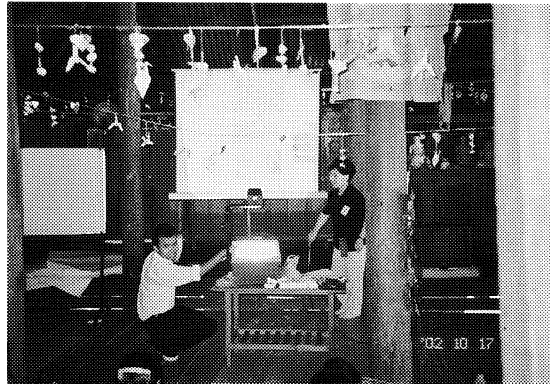


写真14. 山田発表



写真15. 生姜粉作りの体験発表



写真16. 種子ブローチに関心を示す参加者

	<p>た、年一回のコンテストが彼らの手で運営されるようになったなど、地域に根ざした持続性のある活動に発展することができた。</p> <p>これに関連してJVCのプロジェクト村からトレーニングを受けて生姜粉を生産する村人の体験談を手短に発表してもらった。また身近にあることから始めるための一案として、ドングリやヒマワリの種などを使った種子ブローチを披露。生活改善とは「身近なことから自分たちで工夫して始める」ものであることを説明した。小さなことから始め、始めは一人でも、皆で力を合わせてより大きなことに取り組み、地域活動に発展させること、それには家族や行政のサポートも必要なことを強調した。</p> <p>ホワイトボード、OHP、種子ブローチ・生姜粉などの現物使用。</p> <p>参加者からの質問1：ウビの種芋はどこで手に入るか？</p> <p>FAOスタッフからラオス国内でもウビは生産されていることが説明された。しかし山田は、ウビはフィリピンのプロジェクト地でもともと誰もが生産していたからプロジェクトに利用したのであって、ラオスでフィリピンの「ウビ」にあたるものを見つけることが大切と答えた。</p> <p>参加者からの質問2：マーケティングはどうすればいいのか？</p> <p>トレーニングなどで新しい技術を学んでそれを商品化しても買う人がいない、と生姜粉を生産している農家が訴えた。販路開拓は重要な課題である。これに対して山田は技術のトレーニングだけでなく、活動のプロセスに地域を巻き込めば販路も自然と開けてくることを「ウビコンテスト」の例で説明した。技術発表会、お祭りなどを企画して目立つこと、地元新聞に載せてもらうなど地域からの関心を集めることも大切とした。また普及員の技術交換会などを催し、他地域と交流すること、新しいアイデアを常に意識することなども有益である。これはトレーニング主催側へのメッセージであろう。</p> <p>参加者からの質問3：種子ブローチの作り方は？</p> <p>見本と作り方説明書をJVCに寄贈していくことにする。今後はJVCが取りまとめる。</p>
16:50	<p>全体討論：まとめ</p> <p>グループディスカッション2で挙げた「夢」を次のように分析した。</p> <p>自分たちで実現可能なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国内旅行 ・ トラクターの共同購入 <p>行政や外部者と一緒に住民ができること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 簡易水道の整備 ・ 道路整備 ・ 村のクリニック/学校設営 ・ 機織費（織機、繭）の捻出 ・ 家畜を飼う（村所有の土地があれば半分売って捻出する） <p>外部からの支援が必要なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 知識や情報を得ること ・ 先進国への研修旅行
17:15	閉会